

校長室だより

5月号

杉並区立向陽中学校
令和元年5月31日発行
校長 菅野武彦

「人間賛歌が響き渡る学校づくり」を目指して

【今年度のキーワード】

「チーム向陽 ～組織対応・説明責任～」

◇ 【学校経営の重点①】 向陽中生を『自立した学習者』に育てることにこだわる

〈 挑戦に伴う成功や失敗の経験を積ませる／自らの行動や活動の選択能力を磨く 〉

向陽中生がもっている“明るく陽気な雰囲気”は、向陽中学校を創る大切な資質であり、学校行事や宿泊行事で発揮される集団力や一体感を創る原動力になります。元々行事等を楽しむことに長けていることも見逃せません。私が向陽中生を大好きに思う理由は実にこの点にあります。様々な取り組みを楽しもうとすることはそうそうできることではありません。こうした向陽中生の資質を生かすとともに、より一層伸ばす指導を心がけています。その結果、向陽中生は集団力や一体感の価値を実感することで心に刻み込みます。この向陽中生の姿は『自立した学習者』に近づいていると私は考えます。第1学期の目標を「明るい向陽を創ろう！」としている理由のひとつに、向陽中生のよさを思う存分発揮させたいという思いがあります。

こうした向陽中生全体の姿を向陽中生一人一人にも生かす、つまり『自立した学習者』に育てることを本校の課題ととらえたのは、2年間取り組んだ区教育課題研究「主体的・対話的で深い学びを通じた学力の向上」でした。この取り組みの成果は、生徒が受け身の姿勢から抜け出すこと、生徒が4人組グループ学習やペアワークに前向きに取り組むこと、自分でわからないことは周りの人に聞くことをためらわないことなどが挙げられます。生徒の対話的な活動が増えれば、自ずと授業に活気が出てきます。この活気こそが生徒の学びを前向きに変えてくれます。こうした変化を定着させるために、先生方には4人組グループ学習やペアワークを取り入れ、生徒が能動的・対話的に学ぶ授業に変えることと、生徒の自力解決→協働解決→全体での一斉検証という3つの活動を取り入れることの実践をお願いしています。

『自立した学習者』はなにも授業を中心とした学習活動で育成することのみをねらいとしているわけではありません。日常生活での行動や活動においても求めるべきものです。そこで、今年度は生徒に“挑戦”に伴う成功や失敗の経験を十分に積ませたい、自らの行動や活動の選択能力を磨く主体性を育てたいと思っています。「まずは自分で決める、決めたらやってみる、成功も失敗も受け入れる、そこでまた考える、やり直してみる」という行動サイクルを回してやることを推進します。また、中学生であれば、自分はどの行動するか、どんな活動をするかを考え、選択する力も必要です。勿論、その結果を受け入れる力も必要です。この「自己選択」と「結果責任」を自覚することから、生徒はよりよく自分を変えようとするのです。

◇ **【学校経営の重点②】「いじめのない学校づくり」・「いじめ対応」にこだわる**

〈 いじめをしない、させない、許さない／これまでのいじめへの対応を変える 〉

いじめ問題は向陽中学校の重要な課題です。その理由は次の2点からです。いじめがなくならないことと、過去のいじめ対応に重大な誤りがあったことです。前者については、毎年のように誰もが安心して学校生活を送ることができる学校づくりを掲げていますが、なかなか達成できていません。突発的な生徒間のトラブルは繰り返されることはありませんが、いじめは繰り返されます。その都度、繰り返し指導をしますが、一筋縄にはいかないところにこの問題の難しさを感じます。後者については、昨年度の保護者会で説明しましたが、いじめの被害者に寄り添った対応が不十分だったこと、いじめに対する認識が甘く、組織的な対応を十分に取れなかったことが大きな反省点でした。

そこで、今年度はこうした課題にしっかりと正対し課題の克服に取り組みます。まず、生徒同士の良好な人間関係や集団生活を阻害する「わがまま・いじり・嫌がらせ」をさせない指導に重点を置きます。また、生徒に日常的に「こんにちは」「ありがとう」「ごめんなさい」等のあいさつができるよう指導するとともに、お互いさまの精神で、困っている生徒に手を差し伸べるよう指導します。つぎに、いじめ対応については、「いじめ防止・解決に向けた共通理解事項（教職員用）」として7項目を定めました（保護者会にて、今年度「いじめ防止基本方針」の裏面に印刷配付）。毎週開催のいじめ防止委員会を機能させること、いじめの把握から組織的な対応の流れをいじめ防止委員会で検討・対応・報告・記録すること、SNS 情報モラルを身に付けさせること等を実践します。

◇ **【学校経営の重点③】「チーム向陽 ～組織対応・説明責任～」にこだわる**

〈 個人プレーではなく組織プレーで風通しよく／生徒・保護者・地域への説明責任 〉

学校が組織的に対応するための必須の条件は“教職員一人一人が自己の役割と責任を果す”ことにあります。ここで言う“自己の役割と責任”には職名や職務により軽重があります。ということで、当然のことですが、教職員一人一人にこの役割と責任を果すことを求めます。ところが、これだけでは不十分です。「向陽中生を成長させたい、向陽中をよくしたい」という当事者意識をもって職務に当たることも求めます。このことが仕事の質を変えるからです。今年度は“組織対応”の中でも、特に教職員間の「報告・連絡・相談」を取り合える風通しのよい「チーム向陽」をつくり、課題解決に正対したいと思います。

学校が保護者と相互理解を図るためにはそれなりの対応が欠かせません。まずは保護者の知りたい情報を提供することです。今年度は「学年だより」による情報提供を心がけます。また、7月と12月の保護者会がなくなったことに対しては、この校長室だよりによる情報提供を重視したいと思います。学校の方針や考え、生徒の様子等をお伝えします。つぎに、生徒指導等にかかわる保護者に対する対応は丁寧に行い理解を得るようにします。特に生徒間のトラブルやいじめ対応には説明責任を果たしたいと思います。

「これからの向陽中学校」を考える上での“棚卸し”についてご意見をお寄せください。

“棚卸し” 第1弾「年5回の定期考査を4回にする」

→第1学期中間考査を廃止する。現在、年間4回の定期考査が一般的。5月中旬の定期考査は考査範囲が狭い、1年フレンドシップ・スクールと運動会練習が混在し窮屈等。1学期末考査の範囲が広くならないか→4月の学習内容は単元テストで実施する。